

声楽はガンと戦う心の糧

ソプラノ歌手 白石 敬子(ひろこ)

NHKラジオ
明日へのことば
2012年10月14日



白石敬子さんは国際的に活躍しているソプラノ歌手です。武蔵野音楽大学を卒業・専攻科修了後、ウィーン国立音楽大学に留学して首席で卒業。その後、ヨーロッパの数々の国際コンクールで入賞し、1976年に日本人初のウィーン国立劇場の専属歌手となり、プラシド・ドミンゴとも共演した経歴を持ちます。また、正月のNHKニューイヤーオペラコンサートにも連続出場するなど活躍してきました。

40歳で活動の拠点を故郷の藤沢に移した白石さんは、地元のオペラの指導などをして暮らしてきました。しかし2004年、末期の進行性大腸がんと診断され、手術してもあと5年持つかどうかと告げられました。その後、がんの転移が続き、何度も体にメスを入れたり、抗がん剤の投与を受けたりして、がんと闘ってきました。しかし、年の初めの藤沢市ニューイヤー・コンサートや自身のリサイタルの際は、2か月間抗がん剤を断ち、演奏会に備えました。

今月(2012年10月)、白石さんは、デビュー45周年のソプラノ・リサイタルを開くことになっています。現在は、この演奏会に備えて8月から抗がん剤を断ち、体調を整えつつリサイタルの準備に入っています。「歌は私の生きがいであり、がんと闘う気概にもなっている」と白石さんは語ります。

番組では、歌を生きる糧とし、歌でがんの克服に取り組んでいる白石さんに、闘病から得た人生観を語っていただいた。

2012年10月現在 66歳

2012年10月21日 デビュー45周年記念リサイタルを迎える。リサイタルに向け2ヶ月間、抗がん剤を断ちヨガで体調を整えている。「歌手は脚のつまさきから頭のとっぺんまでが楽器」なので体調には人一倍、気をつかう。

今まで合計11回、ガン手術を受けた。歌、有っての自分の人生。

武蔵野音楽大学を卒業。1969年、大学をでて二年目、ロータリークラブの奨学生で音楽の都ウィーンに留学。毎日が興奮した生活だった。ベートーベンが歩いた石の階段を自分の手でさわってきた。留学先の学校では8時30分～18時00まで一時間に10分の休みだけで昼休みなしの授業、想像を絶するものだった。そこで3年間学び首席で卒業。1974年に大きなコンクールを受けた。それ以降、前へ前へチャンスが湧いて来た。

1976年に日本人初のウィーン国立劇場の専属歌手となり、毎日、挨拶をかかさず頑張った。一年後、日本人は真面目で清潔だ・・・と認められた。1969年ごろの日本のイメージは「フジヤマ 芸者」のイメージだった。ドミンゴが指揮者としてスタートした時に歌った。当時の大ベテランの方々と競演でき思い出深い劇場となった。

40歳の時、母が心配で日本に戻った。親孝行の真似事が出来た。藤沢中心に活動。藤沢を日本のザルツブルグにしたいと思った。藤沢の市民オペラに参加している。藤沢でニューイヤーコンサートをはじめて20年続いている。家族で正装をして新年を迎える。

2004年1月に、一枚のレントゲンで末期の進行性大腸ガンと言われた。自覚症状はなかった。16、7年育てたガンだと言われた。手のほどこしょうがない状態・・・と言われ手術をした。4時間の手術だった。その後、ガンは腹膜に移転。抗がん剤を使用するようになった。

この病気はにげてもしかたない。自分はやる事が沢山あるし、教えている生徒さんもある。気力は強いほう。フリーになると精神的に強くないとやっていけない。ガンとの闘いも同じ。

始めの手術から9年が過ぎた。4年前からは強い抗がん剤を使用。歌い手にとってお腹は宝物と同じ。2012年のニューイヤーに賭けた結果、お腹は復活した。常に希望を持つことが大切。

阪神大震災の時も、昨年の東日本大震災の時もチャリティコンサートを実施した。被災者の方々の我慢強さに感激したが映像を見るのがこわかった。

デビュー45周年の記念リサイタルは

- ①周りの人たちへの感謝の気持
 - ②震災被害の方々に祈りの気持を伝える
 - ③復興に携わる人々に希望を与える
- の気持で準備を進めている。

今は、「生かされていることを ひしひしと感ずる！」

ソプラノ歌手をやっていて、良かったことは、勝負なせいで、毎回、次の勉強課題が見つかり、いつもチャレンジチャレンジ！です。

一流の先輩の方々は60代、70代になっても歌っている。

最近では時間の過ぎるのを早く感じる。

ガンと戦っている方々へのメッセージは、「気持を強く持って、諦めない！」頑張っていれば新しい薬、新しい効果的な治療法がでてくる。

リサイタルは「生きる勇気を与えるコンサートにしたい！」